『フランケンシュタイン』の天才論

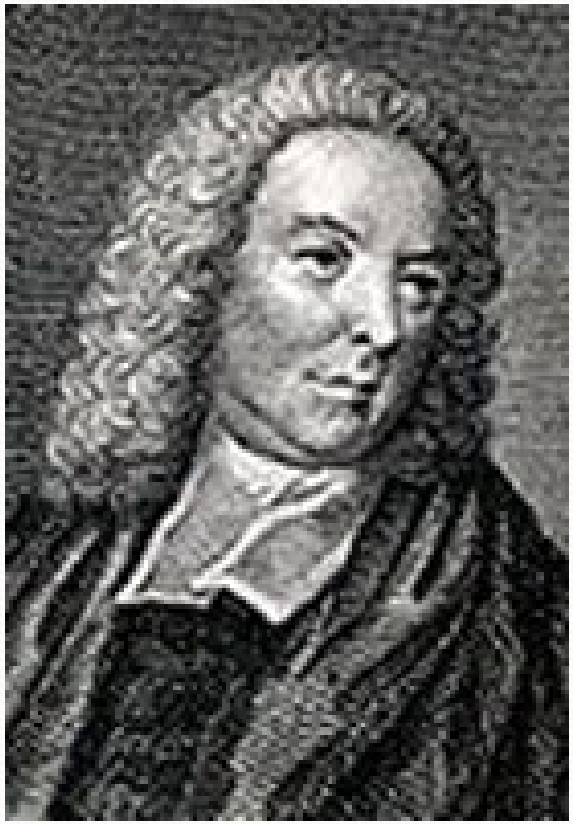
小川公代
ogawa.kimiyo@gmail.com

天才論といえば

- エドワード・ヤング（1683–1765）による「独創的詩作に関する考察」（1759）

「独創者（originals）」あるいは天才を、植物のように自然にぐんぐん「育っていく」ように作品を創造する人であると考え、他人の作品を借りて、苦労して製造する「模倣者」とは異なると主張する。

Edward Young, “Conjectures on Original Composition,” *Authorship: From Plato to the Postmodern*, ed. Sean Burke (Edinburgh: Edinburgh UP, 1995), 38.



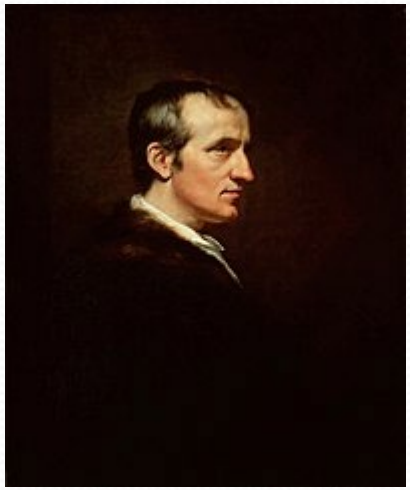
メアリ・シェリー（1797-1851）

医学的観点からこの小説における天才、あるいは天才の起源

赤ん坊のシェリーが《天才》かどうかを診断してもらうため、父**ウィリアム・ゴドウィン** が友人**ウィリアム・ニコルソン**（1753–1815）に観相学の分析を依頼したという逸話

☞ **唯物論的な方法論**

メアリ・シェリーを取り囲む天才たち



- 父親＝**ウィリアム・ゴドウィン**

（1756-1836）

フランス革命直後『政治的正義』（1793）

『ケイレブ・ウィリアムズ』（1794）

- 母親＝**メアリ・ウルストンクラフト**

『女性の権利の擁護』（1792）を書いてイギリス社会に旋風を巻き起こした

- 夫＝**パーシー・ビッシュ・シェリー**

『西風のオード』(1819)

『鎖を解かれたプロメテウス』(1820)

ヘンリー・フュースリー(1741-1825)

フュースリー『夢魔』(1781年)

天才フュースリーの想像力

- ヴィクターが口づけをするやいなや彼女の唇は血の気を失い、死の様相を帯び始め、ついには「母親の遺体」に姿を変え「うじ虫」が這い回る。

（*Frankenstein*. *The Novels and Selected Works of Mary Shelley*. Vol.1. Eds. Nora Crook. London: William Pickering, 1996., p.40）

- 主人公バーチトールドがルイーザという美しい乙女に心を奪われるのだが、夢に現れる彼女もまたバーチトールドに近づくやいなやその快活さが奪われ、花のようにしぼんでしまう

(John William Polidori, *Ernestus Berchtold; or, The Modern Oedipus*. Macdonald, D.L., and Kathleen Sherf, eds. Peterborough: Broadview Press, 2008, p.118）

〈唯物論〉と〈ファンタズマゴリアーナ〉

ウィリアム・ローレンス（1783-1867）＝パーシーの医師

「唯物主義者」＝materialist

《ディオダティ荘》での怪奇談義

バイロン卿、ポリドリ、メアリ／

パーシー・シェリー、

クレア・クレアモント

1816年（夏のない年）に「皆でひとつずつ怪奇譚を書こう（We will each write a ghost story.）」とバイロン卿が提案

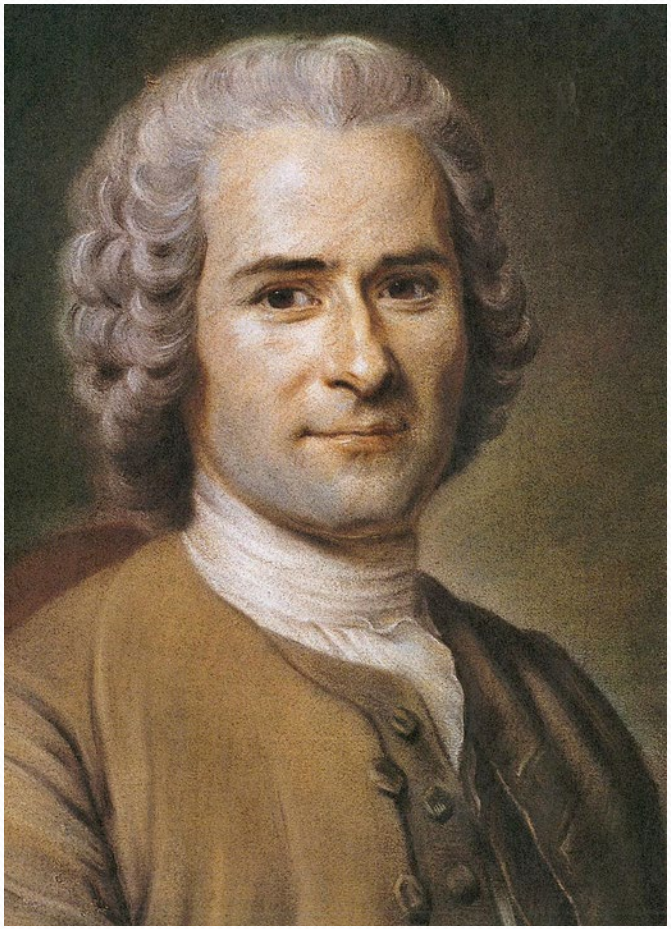
クリーチャー＝天才?

- フランケンシュタインに見捨てられるクリーチャー
- ドレイシー家から漏れ聞く対話からこっそり言葉の意味を学ぶ
- 科学者の日記を理解するようになる
- 醜さゆえに見放されてしまった事実を知る
- ジョン・ミルトンによる『楽園喪失』(1658)や、ヨハン・ゲーテの『若きウェルテルの悩み』(1774)といった難解なテクストでさえ、すらすらと読み上げるようになる

ジェンダーの問題！

- 『フランケンシュタイン』の天才は男である（ヴィクターやクリーチャー、あるいはウォルトン）
- 『ヴァルパーガ』に登場する神に仕える巫女ベアトリーチェは芸術と天才だが女（悲劇の宿命を背負った天才（豊かな感受性が彼らの霊感や思考の源）
- 人間の根本的な動力＝〈霊〉以外に〈電気〉が浮上
- ウィリアム・ローレンスを筆頭として科学の天才は男（チャールズ・ダーウィンの祖父）エラスムス・ダーウィン（1731-1802）

天才のジェンダー論争



ルソーの思想

- ブルジョワ合理主義
- フランス革命の大きな推進力となる
- 自由・平等・社会契約の思想は近代市民社会の基盤となる
- 啓蒙思想家であったが、男性本意の利己的な言説から逃れていない

ウルストンクラフトのルソー批判

To preserve personal beauty, women's glory! the limbs and faculties are cramped with worse than Chinese bands.... (p.110)

「美しさ」が女性の「栄誉」である

そのために、手のみならず知能・能力が中国の纏足（てんそく）よりもがんじがらめに拘束される

今日の問題提起？

- 『フランケンシュタイン』の科学者／男たち
- 実在した科学者ら（エラズムス・ダーウィン、ジョン・アバネシー、ハンフリー・デイヴィー）
- 「電気」か「霊」か？
- 観相学と骨相学の違い（スピリチュアリズムから唯物論へ）
- 骨相学のスプリュツハイムの唯物論➔宿命論、悲観
- 『ヴァルパーガ』は女の天才の物語
- 『フランケンシュタイン』の再考

クリーチャーの霊

「バイロン卿と〔パーシー〕シェリーの間で多くの会話が長い時間交わされました。私は熱心に聞き入っていましたが、ほとんど静かにしていました。ある会話ではありとあらゆる学説が論じられ、別の会話では生命原理の性質について、はたしてそれは発見して伝えることができるのかが論じられました。二人はダーウィン博士の話をしました。……博士はヴァーミセリの欠片を硝子ケースに保存しましたが、やがてなんらかしらの驚くべき方法が用いられて、その欠片が自発的に動き始めたのです。」

Frankenstein or The Modern Prometheus, The 1818 Text, (London: William Pickering, 1993), 179.

エラスムス・ダーウィン（1731-1802）

チャールズ・ダーウィンの祖父
医学書『ズーノミア』（*Zoonomia*, 1794）は広くロマン主義作家らの間で読まれた

動物電気というものの存在を提唱したガルヴァニズム（Galvanism）の応用

メアリ・シェリーの「驚くべき方法」
➔ 電気

「エラスムス・ダーウィンの肖像」（1770, ジョセフ・ライト画）(Wikimedia Commonsより)

ジョン・アバネシー（1764–1831）

- ロンドンにあるイングランド王立外科医師会の会長
- アンチ唯物論主義のジョン・ハンター（1728-1793）を支持し、人間や動植物が備えている霊的な（immaterial)「生命原理」を信じた。反面、エラズムス・ダーウィンの神経学／唯物論も信じた。

"[T]he living principle of nerves has an irritability belonging to it resembling that of muscles, and capable of causing a contraction in them when they are divided."

John Abernethy, *An Enquiry into the Probability and Rationality of Mr Hunter's "Theory of Life"* (1814)

ロマン主義時代の天才論

- 身体が精神に影響を与える〈唯物論〉と霊的な存在の影響を前提とする〈スピリチュアリズム〉の鬩ぎ合いのなかで、天才の起源が探求されるようになったこと。
- アバネシーは、生命の源を身体に混入される〈不可視〉の霊的存在であると強く主張。
- 他方で、彼はエラスムス・ダーウィンの著書に触れて、「刺激が与えられる結果として・・・神経繊維が生じさせる運動を感覚とみなす」ことは近代の医学の「進歩（improvement）」であるという。

〈科学〉と〈宗教〉が互いに侵食しあう言語空間—たとえば、物質に浸透する「霊」(spirit)という表現—を軽視していると言えるだろう。なぜなら、当時の科学者たちにとって、〈科学〉と〈宗教〉は必ずしも対立する関係にあったわけではないからだ

ウィリアム・ローレンス　対 ジョン・アバネシーとの生命原理をめぐる医学論争について語った

“Spark”という言葉の二重性

- 人間の身体には〈霊〉が混入されているのか、あるいは、臓器、筋肉、血管などの生理学的な機能によって精神が動かされるのか。

「生命のない死体に生気を注入することができる」

（I might infuse a *spark* of being into the lifeless thing）（Shelley 38）

- メアリ・シェリーは魂の「生気」と、電気の「火花」のどちらを想定していたのだろうか。

フランケンシュタイン＝科学／錬金術？

- 「雷（thunder and lightening）」に遭遇することによって（24）、幼少期から親しんできた錬金術(アルケミー)から一旦離れ、「近代の科学システム（a modern system of science）」の中心に位置づけられた電気へと関心をシフト

＊錬金術師のパラケルススやコーネリウス・アグリッパなどは、賢者の石（＝エリクサー）を用いて医療活動を行っていたといわれている。

- 父親には「くだらないもの（trash）」（23）と一掃される。錬金術への関心を完全になくしたわけではなかった
- 「幽霊や悪魔を召喚する」物語を熱心に追い求めた（24）
- 中世の錬金術を軽蔑したケンプ博士と、錬金術も最先端の科学的知識も読んだウォールドマン博士

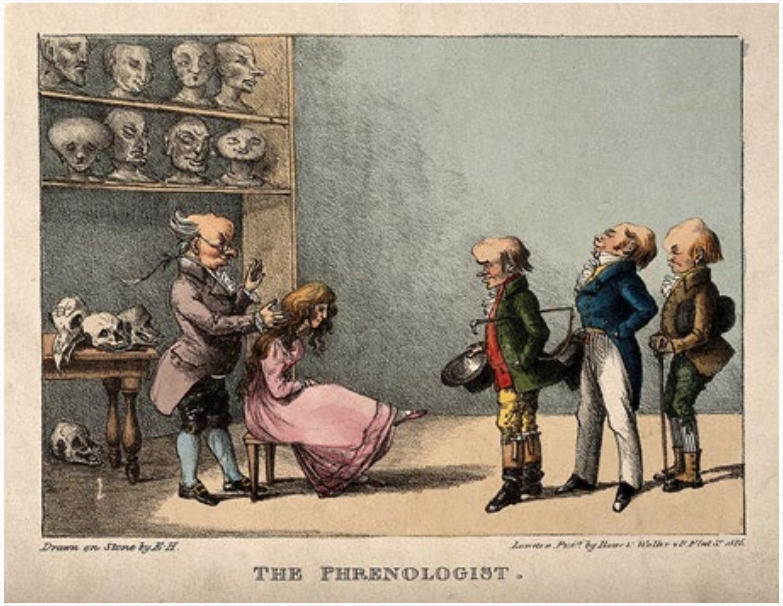
『フランケンシュタイン』の言葉

- 科学者フランケンシュタインがクリーチャーを「墓場から解き放たれた私の霊」(my own *spirit* let loose from the grave)と呼んでいる(57)
- 生命をもたない身体を継ぎ接ぎで創り、そこに「生命を注入する(infusing life into)」(39)という表現も用いている。なにより、フランケンシュタインが最も力を入れるのは「それ(霊)を入れるフレーム」を創り出すことである(35)。
- スイスのディオダティ荘の怪奇談義でバイロン卿が提案したのは「幽霊物語」

人間の性質は何に決定づけられるのか

観相学（physiognomy）
ヨハン・カスパー・ラヴァーター（1741-1801）

骨相学（phrenology）
フランツ・ジョセフ・ガル(1758-1828)とヨハン・ガスパー・スプルツハイム（1776-1832）
*スプルツハイムの骨相学を手掛かりに見ていくと、「〔人間も動物も〕器官・臓器やその構成の本質は変えられない」という宿命論にたどり着く



「フランツ・ジョセフ・ガルが少女の頭を診断中」
（1825年, エドワード・ハル画）
(Wikimedia Commonsより)

『ヴァルパーガ』(1823)

筋書：英雄カストルッチョの少年時代、青年時代と彼に焦点が当てられて物語が進行する(歴史ロマンスの形態)。彼の生まれはアンテルミネッリ家というルッカの名家。対抗勢力であるゲルフの武力によって追放され、カストルッチョは復讐欲に燃えるようになる。政治的な執念をもち続ける彼は、幼馴染で婚約者ユーサネイジアとも、彼に身も心も捧げようとするベアトリーチェとも愛を成就させることはない。

女性の天才「ベアトリーチェ」

- 『ヴァルパーガ』は、カストルッチョをめぐるユーサネイジアとベアトリーチェの三角関係を描く複雑な物語でもある。ベアトリーチェは、神意をつかさどる巫女として政治的な力さえある天才。
- 彼女の天才の源泉は、その豊かな感受性。
- 彼女の輝く目と赤く火照る頬は、「彼女を崇高にする霊／生気（spirit）」の表れ。
- メアリ・シェリーの『ヴァルパーガ』に描かれるベアトリーチェは、男性権力者の犠牲者として知られる「ベアトリーチェ・チェンチ」のイメージが重ねられている。

『ヴァルパーガ』の引用分析

- スプルツハイムの宿命論的な思想の影響。ベアトリーチェの憎しみはカストルッチョにではなく、「病いの種を作り出した神」([God] created the seeds of disease)に向けられている(342)
- メアリ・シェリーの宿命論、悲観(家族の死、子供の死)

メアリが悲観的に物事を考えてしまう弱さについて友人への手紙で次のようにスプルツハイムに言及して説明。

> 「自分が他の人よりも弱い土(肉体)から創造されたのではないかと考えると(I am made of frailer clay)、スプルツハイムに共感します。」

(A letter to Frances Wright, 30 December 1830. *Selected Letters of Mary Wollstonecraft Shelley,* ed. Betty T. Bennett, (Baltimore: Johns Hopkins University Press, 1995), 236.)

クリーチャーはメアリ・シェリー？

- ヴィクターやウォルトンのような科学者の天才ではない。
- 文学の登場人物にも共感する感受性の天才
- 男であるクリーチャーは、どうじに女性作家のメアリ・シェリー自身の心理も反映。理性主義者で、人間の自由意志の存在を信じていた彼女の両親（とくにウルストンクラフト）でさえ、感情に流される人間の弱さを認めていた。おそらく、両親の〈理性〉〈科学〉への信頼を継承したいと思いながら、衝動の破壊性を回避できない人間の宿命、あるいは弱さを理解しようした。
- 感受性溢れるベアトリーチェによる愛の希求とクリーチャーによる愛の渇望は共鳴し合っている。

ポスト・デカルトの流動的自己を表象

- 人間の自由意志を疑問に付したのはスプルツハイム。
- スプルツハイムの骨相学という科学言説に共感したのは、メアリ・シェリー。
- 『フランケンシュタイン』で頻繁に用いられる“spirit”や“animal spirit”という言葉は「火花」とも「霊」とも解釈しうる。
- 〈科学〉と〈宗教〉が互いに侵食し合うような言説空間では、流動的に、都合よく意味を変態させることで当時の歴史的文脈においてうまく機能していた。
- 執拗に固定化していたジェンダーの枠組みを越えようとする試みでもあった（『ヴァルパーガ』はその典型例？）
- 『フランケンシュタイン』と『ヴァルパーガ』をセットで捉える。